

スティーヴン・マロック &
 コルウィン・トレヴァーセン (編集)
 『絆の音楽性：
 つながりの基盤を求めて』

八木 ありさ

本書は2009年に Oxford University Press より刊行された Communicative Musicality: Exploring the Basis of Human Companionship の邦訳版で、音楽心理学者、音楽教育学者、認知科学者、発達心理学者、ダンス・セラピー研究者などからなる37人の著者による27の論文が、①音楽性の起源と精神生物学、②乳児期における音楽性、③音楽性と癒し、④子どもの学びにおける音楽性、⑤演奏行為における音楽性、の5部に構成された590頁からなる大部である。原語版から少々遅れて2018年にこの邦訳版刊行後、紹介が待たれていた。

二人の編者が執筆した、全体の導入となる第1章「音楽性：生きることの生ソフィオロジー気と意味の交流」の冒頭では「人と人とは身振りや音声を通して意思と感情をたちどころに共有する」と、本書の「音楽」がいわゆる音世界のことだけではなく、身体表現・身体運動とも深く関わっていることが述べられている。また新生児と母親の音声による関わりの生成を材料に、本書では「音楽性」というメタファーを用いて、「動きながら生き、考え、想像し、記憶する」私たちの動きの本質と価値を捉えようとし、またこの動きながらの経験が「必ず共感的に共有される」ということを強調するために「コミュニケーション」と形容することにしたと説明されている。様々な領域で関心の高い「共振」「共感」や「意味」が、異なる主体の間でいかに成立しうるのか、その基盤を旋律的、リズム的な共創性に求めてゆく。CommunicativeやCompanionshipを邦訳で「絆」「つながり」とした所以もそのあたりにありそうである。

個別の内容を少々紹介すると、第3章では認知記号論から見た音楽経験、第5章ではヒトが進化してきたプロセスと音楽の機能の関係が記述され、2021年度第73回舞踊学会大会の山極壽一先生による講演「身体の共鳴と共感能力の進化」とも大いに響きあう内容である。

心理学者ブラッドリーによる第12章では、他者に対する行動つまり応答を引き出す状況が音楽的と捉えられている。よく見かける母子間の2者関係の分析ではなく、3人組の乳児の中でどのよう

に注視や指向的発声が現れてゆくか、厚い記述とエピソードの読み取りによって検討されている。

紹介者が専門としているダンス・セラピーとの関わりでは、第18章「踊るという人間の本质」が所収されている。視聴覚障がいはいはコミュニケーションの領域で深刻な影響があるうえ、外的な情報としての音楽やダンスと触れる術が極めて限られていることから、当事者にとって音楽やダンスはどうしても内部で生まれてくる必要がある。著者ポンドは、発話のない6人の視聴覚障がい児を2つのグループに分け、30分のセッションを週に4回、「ダンス」と「遊び」の2条件を交差させて5週間ずつ実施し、「参与」を操作的に定義した上で、録画データをコード化して行動分析を行った。そして、子どもたちと著者のダンスの中で起こる「儀式化」「反復」が母子間の関係形成と共通すること、また自分の体の重さを感じてそれを探る（傾いたり、ロッキングしたり、引っ張りあってバランスをとったり）活動では自立的になってゆくこと、こうして十分に繰り返された動きは共同体的な意味を獲得していくこと、ダンスの中ではリーダーシップの所在が固定されず自由に引き継がれ、個別の特異性を包摂したまま集団的スタイル(著者の言葉では「美的コミュニティ」)が生み出されること、などを観察している。

音楽演奏とコンテンポラリーダンスの研究者であるデヴィッドソンと編者の一人であるマロックによる第26章「音楽的なコミュニケーション：演奏における身体の動き」では、人間のコミュニケーションの基本的な形としての音楽における動きが見つめられる。人気ポップ歌手の歌唱とその際の身体の動きの分析や、2人の管楽器奏者のソロ演奏時と二重奏時の比較分析を通して、音楽が生み出され伝えられていく際に身体が重要な役割を果たしていることを説明しようとする。以前から、オーケストラ演奏を会場で聞く時に、オーケストラの身体が舞踊に見えて仕方がない自分の経験とも重なった。

以上、散漫に紹介したが、検討対象は多岐に渡っていても、本書の中では、非言語情報を通じて応答的であるということが常に考察のポイントになってくる。

翻訳はそれぞれの学領域と近い研究者が行っているのだが、翻訳特有の硬い表現が多く、舞踊領域の目からは違和感のある箇所も散見される。通読するにはヴォリュームが大きすぎるし、27の論文それぞれに一定の完結があるので、関心が湧く論文から読み始めるのが良いかもしれない。

(音楽之友社 2018年刊行)

José SASPORTES (a cura di)
Storia della danza italiana.
Dalle origini ai giorni nostri

横田 さやか

「この本を待ち侘びて50年にもなる。舞踊に関心を抱いて以来、イタリア舞踊史というものを手にすることを望んできた。それがヨーロッパのバレエ史の理解に欠かせない1ピースだと思えたからであり、今もなおそう考えている。」

本書『イタリア舞踊史 その起源から現在まで』の編者サスポルテス（1937年生まれ）は、前書きをこのように感慨深げに書き出している。歴史化された“イタリアの”舞踊を概観する一冊がなかなか見当たらないのは、なにもわれわれイタリア国外の研究者ばかりでない。そもそも国内の研究者も、その必要に隈なく答えてくれる一冊を手にしたことがなかったのだ。広くは統一国家としての歴史の短さにも、狭くは学術界における舞踊学の新しさにもこの欠落の理由を帰することはできるだろう。さらには、早くも80年代から『イタリア舞踊 (La danza italiana)』と題した文芸誌を発行することで、舞踊に“イタリアの”という形容詞をつけていた舞踊評論家サスポルテスこそ、リスボン出身である。つまり、イタリア半島を外から俯瞰する視座と切実な需要が、半島の舞踊史を本文424頁と絵画や書籍等の写真資料24頁に纏めることを可能にしたといえるだろう。

本書は、舞踊の歴史の始まりをルネサンスの黎明に遡り、第1章「15世紀と16世紀」に、メートル・ド・バレエ、舞踊教則本、祝祭における舞踊演目の誕生を舞踊が栄えた都市ごとに解説し、第2章「17世紀」に、宮廷バレエと劇場舞踊について、後に“イタリア風”と称されていく表現性などに特徴付けられる個性が各領国に独自に確立された展開を解説する。第3章「18世紀と19世紀初頭」では、パントマイム舞踊から舞踊劇までの舞踊形式について、台本、大小のカンパニー、舞踊テクニック、そして音楽がそれぞれの成立をみる過程を解き明かす。当然ながら地理的な線引きをせず、次章に渡って舞踊の発展をフランスと地続きの視野に収めている。第4章「19世紀」は、ロマンティック・バレエがイタリアにどのように需要されていったかを、第5章「20世紀」は、中央ヨーロッパにモダンダンスが隆盛するのと前後してイタリアにどのような舞踊が生まれていたかを概観する。統一国家イタリアという実体のない概念に対し、舞踊にも統一的な“イタリア舞踊”の形式が成立したか否かといった画一的な議論に陥らず、外国からの舞踊形式、振付家、ダンサーらの受容によって多様な作品が誕生していく様が明

らかにされる。最終章「20世紀以降」は、80年代から今日までを射程に収めているため、歴史を語るこれまでの章とはやや異なり、現在も現役で活動しているアーティストたちの活動実績の紹介にもなっている。歴史を成文化すると必然的に同時代に近くなればなるほど言葉少なになり、それに割かれる章も縮小しがちなものだが、本書は、20世紀と今世紀初頭の十年間にも力点を置いている。西洋の舞踊史において、イタリアの舞踊史の充実に見合う頁数を必要とするのが20世紀以降であるとは考え難いだろう。それに対し、本書が同時代の貴重な証言を舞踊史の一部として豊かに残した意義は、今後検証されていくことになるだろう。

歴史を編纂するとは、諸材料を集め時間軸に即してそれらを編む作業だが、本書でのその作業は、イタリアの舞踊を年表に線化するにとどまらない。むしろ、枝葉のように固有の現象が絡まり合うものとしてイタリアの舞踊が描き出されている。かといって、各現象をそれぞれ平面に整理して地図化してもいない。空間に舞う、舞踊にまつわるいわば立体の多面複合体を立ち上げた印象だ。実際、各章ごと、各時代ごとに、専門とする舞踊研究者が担当する共同執筆の形をとっている。そして、これこそが編者の狙いでもあるが、本書は、イタリアの舞踊が西洋近代史の歴史的、文化的、社会的、さらに政治的背景のもとにいかに成立し、いかに発展してきたかを余すところなく示してくれる。舞踊研究者のみならず、芸術はもちろん、社会学、政治史等の文脈にも参考となる一冊である。それゆえ、出版から年数が経っているが、時期を超えて学会員の関心に応える文献として紹介した。同時に、邦訳の出版が期待される。

(EDT, Torino, 2011)

Ulf OTTO. *Das Theater der Elektrizität: Technologie und Spektakel im ausgehenden 19. Jahrhundert.*

古後 奈緒子

本書『電気の劇場 19世紀末葉の技術とスペクタクル』は、劇場の電化を主題とする新たな歴史叙述の試みである。高解像度で描き出されるのは、1880年代から第一次世界大戦前後にかけてのヨーロッパ大都市の劇場を舞台とした電気技術の実現過程となる。叙述の特徴は、芸術に結実する美的技術のみならず、あらゆる劇場表現を支える基幹技術の初期過程を、並行し交差する相互作用の連続に浮かび上がらせる点にある。そこでは照明に代表される技術機能ひとつとっても、任意の技術

刷新が劇場表現を変えたといった短絡は回避される。灯が燃焼を脱する契機は劇場の衛生と安全を求める世論と分かち難く、照明の前提をなす諸技術--発電、蓄電、配電、加減制御など--はバロックに由来する劇場機構を破壊し新たなシステムを構築する。かつそれとて劇場に完結せず、化石燃料の供給網、株式投資、特許といった社会制度と浸透し合っている。その果てに成立した電気劇場は、知覚され得るものとされ得ないものを定める美的制度でもある。

以上に挙げられる主題項目は、科学技術史、文化史、メディア研究の一端に知られてきたが、演劇史家は、それらを包括し、舞台の表／裏、劇場の内／外を超えて関係づけながら、舞台芸術研究の根幹に関わる問いを展開する。何が技術と芸術の分かれ目を決めるのか。具体的には、新興技術と旧来の芸術制度の接続面で、何が表舞台に具現され、何が舞台の裏や下に埋め込まれていったのか。その過程で電気はいかに言説の中で非物質化され、メディアとして透明化していったのか。灯体から投光器への移行過程で、機器と働く人間の位置、関係性はいかに変化したか。

19世紀の演劇史は20世紀の視点から書かれてきた。20世紀の視点は人間に視線を誘導し、その注視や魅力を生み出す機構は自明のものとしてきた。1990年代の芸術史再考の流れでなされてきたこの反省は、作者としてのダンサーのテキストを主要な典拠にディシプリンを形成してきた舞踊学により当てはまる。自らがその内部にある構造や体系を超えて事物の連関を把握するため、間メディア研究を標榜する著者は、進歩史観を構成する概念やナラティブだけでなく、因果関係を徹底的に問い直す。資料の帰属を一つの学問領域に限らず、学際的な研究分野を個別に深めかつ組み合わせるこれまでになく文脈を作り、領域横断的なパースペクティブをとる醍醐味を語る。参照されるのは、言説や制度を物質資料との関係に立ち戻って捉えるM.フーコーと、芸術家と観客のみならず人間にとどまらぬアクターの共働を観察するB.ラトゥールの研究方法である。

以上の戦略とともに電気技術という主題領域を開いた本書の舞踊学への貢献は、歴史的意義に比べ注目の低かった舞台舞踊の仕事に数章が割かれていることにとどまらない。投影面とされたバレリーナの身体から投光器を操るモダンダンスの作家への移行過程を、人間中心主義というこの時代最大の遺産をも脱して観察する回路を、本書は与えてくれる。

(J.B. Metzler, 2020年4月刊行)